



令和4年度

# 鹿児島県の教育

12月号

## 巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会高等学校長部会副部長

池田浩一  
鹿児島県立甲南高等学校長

## 「語るべき」について

今年、「PMPM（午後の校長ミーティング）」と称して、各クラス数名の生徒と自由に話す時間を設け、いろんな話を聞いている。今の生活、将来の夢など話す内容は、様々な個性の発露があり面白い。なるほどと思うのが、他の生徒の話聞く生徒のリアクションである。「そうなんだ」「いつ頃から？」等の反応は、人の夢を聞くことの意義、大切さを痛感させる。

教育学者森信三は「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に。」と述べているが、このことと関連して、様々な連想ができる。例えば、「べき」と「必ず」という強い組み合わせの対象は、どんな人なのだろう。その前の「一生のうちに」という表現から、軽々としたものはなく、人生を決定づけるような出会いを示唆しているであろう。人との出会いが日常の身にとって、自分がその対象などという尊大な気持ちはさらさらないが、可塑性の塊である（伸びしろしかない）生徒たちにとっては、刺激を与える友や人との出会いがいかに大切かと言うまでも無い。一方、後半の表現「一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に」が引つかかる。時宜を得た出会いには、当人たちの意図とは別の、必然としての出会いを示しているのだから、関わりを持つ必要のある我々の場合には、出会いが大切になるように意識するのが、大仰な意味は求めなくとも当然であろうと思う。

同じように日々の場面では、意図すべき発言もある。当然、あえて発言することの一方で、昨今の風潮の中で発言を躊躇してしまう場面もある。語るべき場面で伝えることというのは普通に存在する。意図の有無にかかわらず、実は日常はそういった言葉に溢れているとも言える。流れては消える言葉もあるが、刻まれる言葉もある。語り手の立場を意識した時に、「語るべき」言葉・時の重要性も同様に説明できると思う。その力は内面を磨くことと経験を積むことで身に付くはずだが、難しいからこそいくつになっても、語った後に、反省に苛まれるとも言える。今年の生徒たちとの語らいでもそうだった。

伝達や協働の在り方は機器と共に進歩を遂げているが、不易の部分を考え続けていきたいとも思う。森信三には、次のような言葉もある。「二眼は遠く歴史の彼方に、一眼は脚下の実践に」。実践無き理念は空虚であり、言葉と乖離した発言者の姿に説得力など無い。「語るべき」は動くべきと連動すること忘れてはならない。

## \* おもな内容 \*

|          |    |               |    |
|----------|----|---------------|----|
| 巻頭言      | 1  | 話のひろば         | 13 |
| 随想       | 2  | 読書案内          | 15 |
| 提言       | 3  | 趣味・文芸         | 18 |
| わが校の学校経営 | 5  | 郷土の紹介         | 19 |
| 子どもが輝く教育 | 7  | 一般財団法人校長会館だより | 20 |
| 心に残るひとこと | 9  | 編集後記          | 20 |
| ある日の校長講話 | 11 |               |    |

令和4(2022)年 12月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



## 人生波瀾万丈 継続は力なり

(株)はしコーポレーション  
代表取締役社長

柘 壽 一

### 略 歴

一九七〇年 慶応義塾大学経済学部中退  
一九七〇年 柘産業入社  
一九九〇年 マルハ商事(株)社長就任  
(現はしコーポレーション)  
一九九六年 阿久根ロータリークラブ会長就任  
(現会員)  
二〇〇四年 出水倫理法人会会長就任(現相談役)  
二〇一四年 阿久根商工会議所副会頭

貫った。波瀾万丈の人生を振り返る時に、四つ

のテストと共に松下幸之助の本は、苦しいと思える状況でも、継続することで道は必ず拓ける！という人生の指標となる大切な存在です。

最後に、今年で金婚式を迎え、子供たちが力を合わせて祝宴を開いてくれました。家族の関係は、愛情深いほどに乗り越える節もあり、順風満帆ばかりではございませんでしたが、時が経つことで心配の基だと思っていたことが、実は宝物のように尊いものだったと気付くことができました。

夫唱婦随、常に支え合い金婚式まで迎えられたことに感謝の気持ちでおります。

年を重ね、果たす役割、責任の重さは変化していきますが、何か迷った時には「四つのテスト」に照らし、考えて行動に移していきたいと思っております。

### 四つのテスト

- ① 真実かどうか
- ② みんなに公平か
- ③ 好意と友情を深めるか
- ④ みんなのためになるかどうか

毎週四つのテストを唱和することを四九年続けてきました。迷った時必ず四つのテストが私の道を示してくれていたように思います。

時代は大きく変わり、求められるものが変化していく中、一〇〇年企業として常に地域の皆様に支えられた歴史があります。感謝を返すこととは、「事業継続すること」そこから生まれる「雇用の確保・継続」海や山の幸など、阿久根の豊富な特産品の販売は、大切な地域貢献と考えることができました。

経営の神様と言われる松下幸之助の有名な言葉「天からの三つの恵み」貧しい生まれだから一生懸命働き、僅かな給料に感謝できた。身体が弱かったから、人を信じて、任せることができた。学歴がなかったから、人に素直に教えて

地元阿久根市で創業一〇一年。

祖父である初代柘庄右衛門は、五歳で母、七歳で父を亡くしました。十八歳年上の聡明で心優しい姉の献身的な支えと、強い信念で天稗棒を担いで行商をし、「堪忍。決して怒らない」を人生訓として二十七歳から自宅の床の間に「堪忍」と書いて生涯心に刻みました。

商売とは人の協力により支えられている。祖父柘庄右衛門は、地域の教育、発展のために奉仕したい、恩返しをしたいと晩年考えており、西目小学校へ書物の寄贈、阿久根市の図書館建設を最後のご奉公と致しました。

西目小学校とのご縁は、初代庄右衛門から三代目である私、そして今は長男の庄太郎へと続いていくことは、私にとって基本に立ち返る貴重なご縁であります。

振り返ると、波瀾万丈の人生でした。

私は、阿久根ロータリークラブに在籍しております。唯一の創立メンバーとして活動する中、指針となる言葉があります。



## へき地・小規模校教育への思い

蔵之元小(北) 古川 進

### 一 はじめに

教職生活三十四年目、大半をへき地や小規模校で勤めてきた。現任の長島町の勤務は教頭時代を含め二度目、北薩地区の山間部で育ってきた私には、非常にありがたいことである。本校の校舎からは、長島海峡を挟み、点在する熊本県天草の島々を望むことができる。特に夕日に映えるさまは、正に風光明媚と言えるものである。また、蔵之元港と天草の牛深港を結ぶフェリーが行き来しており、学校前の国道を県外ナンバーの車両が通ることとは日常である。

### 二 創立百五十周年を目前にして

本校は、来年度創立百五十周年を迎える。過去には「山坂達者」に懸命に取り組み、文部省の保健体育表彰を受けている学校である。奇しくも本年度から、県の「運動大好きかごしまっ子」育成推進事業の指定を受け、取り組み始めたところである。

本校の児童数は五十、学級数は七。児童数の減少が進み、本年度は複式学級を一つ有している。学校の適正規模・学校再編の波は避けて通れないものであることは重々承知しているが、ここでは取立てへき地及び小規模校のよさを述べさせていただきたい。

### 三 へき地・小規模校のよさ

本校の職員キャッチフレーズは、「見つめる・寄り添う・関わる」である。一人一人の子どもをしっかりと見つめ、そして寄り添ってみること、その子への関わり方が自ずと見えてくることを、職員に度々話している。短期的にも長期的にも大切にしてほしい言葉である。「このフレーズが有言実行できる学校でありたい、そのような学校に近づきたい」と思っている。

これまで勤務した学校においても、「これぞ、へき地のよさ」を感じることができた。その一つが留學制度を取り入れた学校であった。首都圏等で不登校に陥った子ども、学力不振でより個に応じた指導を求める子どもなど、さまざまな事情や特性によって留學してくる子どもが多かった。親元を離れ、不安を抱えながら転入してきた子どもが、すぐさま地元の子どもたちと打ち解け合う。到着したその日の内から現地の子どもたちと遊び始めるのである。これには理由がある。異年齢での活動や遊びが日常的に必然だからである。例えば、不登校傾向の中学生が転入してきて、同学年の友達だけに縛られることはない。まず自分に合う小学生と仲良くなったとして

### 四 地域とのつながりを強みに

現在コロナ感染拡大防止の観点から、活動自体を取りやめたり内容を制限したりしている行事や活動は、どの学校にも多いと思われる。本校においては、地域高齢者への花の宅配活動、少年消防クラブ、海洋型体力づくり(カヌー・カッター学習)の推進など。町内では、長島造形美術展をはじめ、海峡横断カヌー大会や相撲大会、地元のプリを生かした料理教室など、わくわくさせるものが目白押しである。コロナ禍が解けたならば、地域の教育力(献身的な学校応援団・PTA活動への父親参加率の高さ等)を強みとした学校経営ができるものと大いに期待しているところである。



### 五 おわりに

語弊があるかもしれないが、大きな学校へ順応できなかった子どもたちの、受け皿的な要素を担うことができる小規模校の役割は、将来的にも必要とされると考える。今後小規模校ならではの存在価値、意地を見せたいところである。本校に伝わる「われは海の子大きな心」をもつ子どもたちを育て、一人一人が日本各地や世界で羽ばたく姿をイメージしていきたい。



## 学習環境を生かした学びの可能性

霧島高 竹下 兼次

### 一 はじめに

私は、これまでに複数の学科を併設した学校を経験させていただいた。もともと工業系の職員であり、以前から工業高校の可能性や面白さ、魅力を感じていた。工業高校にはいろいろな専門技術を学ぶ専門学科があり、ちよっとした「町工場」の集まりのように思える。一つの工業高校で、設置学科が協力し合っている、一つの作品を作り出す。又は、事業展開（ブランド化）はできないか、もっと実践的な学びが展開できないかと考えていた。その後、異なる大学科を併設する学校も経験することとなり、それぞれの学科が持つ特徴を生かして、学校内での協働や横断的な学びの可能性を感じていた。

### 二 今求められている資質・能力

新学習指導要領により、「生きる力」を育むことを目指し、身に付けさせたい資質・能力は、①知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう姿勢・人間性である。

これらの力は数多くの経験や体験から得られた知識や技能により身に付くものと考えられる。また、高等学校教育の在り方について、

高校の特色化・魅力化のため、スクールミツションの再定義や普通科改革・専門学科改革、新しい時代に求められる総合学科の在り方など、各学科が取り組むべき方策が求められており、キーワードとして地域社会や関係機関との連携や協働がある。

### 三 学校の教育環境による学びの可能性

専門学校で学ぶ生徒は、多くの専門知識を習得しているが、自身の専攻する学科の知識・技能の習得にとどまっていると感じる。また、併設の学校においても同様である。学校によっては教育環境の中に、例えば工業・商業・家庭などいろいろな専門知識を持った人材（教員）がいる。このような教育環境を生かしながら、幅広い学習や体験を通して、生徒の興味・関心を高め、多くの知識・技能や豊かな思考力の構築につながれると考える。

普通科高校では、「学際領域」「地域社会」に関する学科の設置に伴い、学びや教科等横断的な学びを実践するため、地域・大学・国際機関等との連携・協力が必要とある。

学校の教育環境の充実と、それを十分に活用することで、より高い三つの資質・能力を

身に付けることができると期待している。

### 四 地域環境からの学びの可能性

新学習指導要領では、地域に開かれた学校を目指した取り組みが推進され、地域人材の活用や部活動への外部指導者の活用など地域の教育力への期待が高まっている。

学校という限られた空間だけでの学びではなく、豊かな人生経験を積み、多様な知識と経験を持つ地域の人材を活用することで、地域との連携・協働を通して得られる深い学びが、生徒にとって「生きる力」の習得につながると考える。

本校は機械科の「ものづくり」、総合学科の「おもてなし活動」を通して、地域貢献活動を行っている。地域で行われる様々なイベントへの参加や地元食材を活用した商品開発や製造・販売の実践など、多くの機会を与えていただき、学びを深めることができている。「地域を知り・地域から学び・地域の活性化に寄与する人材育成」が生徒の社会性や人間力の向上につながっている。

### 五 おわりに

このように、生徒の置かれている学校の教育環境や地域の特徴、豊かな自然環境等を生かすとともに、生徒を取り巻く多くの学習の機会を有効に活用することで「ここでしか学べない教育活動」「特色ある教育活動」の実践が期待できる。課題も少なくはないが、学校・家庭・地域の三者の協力の下、学習環境を生かした学びの可能性に期待している。



## 一人一人の子が輝く 勝目の子

勝目小(南) 大戸 徹 三

## 一 はじめに

本校区は、川辺盆地の南に位置し、南北に長く国道・県道沿いに集落が広がり五つの地区からなる。校区を縦断するように流れる大谷川沿いには水田が広がり、野や山に緑があふれ、豊かな自然に恵まれている。保護者や校区民は、学校教育活動に関心が高く、学校行事等にも協力的で、伝統的に教育文化を重んじる風風があり、体験学習(稲作体験、豆腐作り、ケナフからの卒業証書づくりなど)や、地域行事(太鼓踊り、相撲大会)も盛んで、学校・地域・家庭の連携をとり、地域で子どもを育てようとする意識が高い。児童数は、ここ数年減少傾向にあり、現在七学級、児童数五七名で、創立一四二年を迎える。

## 二 本校の経営方針

南九州市の教育政策「心の豊かさ創造力を育む教育・文化のまちづくり」をもとに、本校の教育目標を『心豊かでたくましく、自ら考え判断し、行動できる子どもの育成』【キヤッチフレーズ(一人一人の子どもが輝く勝目の子)】として、全職員が心を一つに子ども一人一人の夢(目標) 実現のために取り組んでいる。

## 三 目標実現に向けての具体策

(一) 三つの「あ」の実践を通して

## ア 頭を使う

自ら考え判断する子どもの育成を目指す

し、何事にも「頭を使う(自ら考え判断する)」ことを念頭において活動させている。また、学力向上のために、六つの共通実践事項(授業の充実、表現力の向上、習熟の時間の確保、情報教育、家庭学習、読書の習慣化)を設定し、毎学期の取組状況を評価し改善策をたて実践している。

## イ あいさつをする

学校自慢である「あいさつ」をより定着させるために、丁寧に立ち止まってすることを心掛けさせている。また、校内挨拶ロードの設定や子どもたちも自主的に毎朝の挨拶運動を行っている。さらに、地域ボランティアや保護者も計画的に登下校の立哨指導等を行い、全員で気持ちよいあいさつができる子どもを増やそうとする意識が高まっている。

## ウ 朝の力をつける

学級での保健指導だけでなく、学級PTAや学校保健委員会の際に外部講師を招き(栄養教諭や市健康推進課等)、食事のとり方や睡眠の必要性などを中心とした講演会を実施して、保護者にも、早寝・早起き・朝ごはんの重要性に対する認識を深めてもらっている。その成果もあり、健康観察で体の不調を訴えたり早退したりする子はほとんどいない。

## (二) 全職員が子どもの担任として

いじめや不登校を出さないためにも、全職員がすべての子どもの担任であるという意識を高める必要がある。そこで、週二回の職員朝会や毎月の職員会議後には、子どもの学習・生活状況などの情報交換会を開いている。また、課題があったときの具体的な対応策までを具体的に話し合っている。このことが、問題発生の未然防止にもつながっている。

## (三) 地域の人材を生かして

地域の人材を生かし、体験活動を取り入れていく。主な活動を挙げると、  
ア 米作り(三・四年生)

約二千坪の広い田んぼでもち米を育てている。人の手による田植えから収穫までの体験から田植え機・コンバイン・ドローンを活用した機械操作の体験型活動へ内容を変えている。また、収穫したもち米は、お世話になった方々へのお礼にしたりPTAバザーで販売したりしている。

## イ 自作の卒業証書用紙作り(六年生)

ケナフを種から育て、一月に収穫、二月から卒業証書用紙作りを行っている。親子で、紙すきから成型まで行い、自作の卒業証書用紙を作成している。

## ウ 豆腐作り(五年生)

学校で大豆を栽培し、地元の豆腐屋さんを講師として招き、親子で豆腐作りを体験している。

## 四 おわりに

今後も、学校職員全体が組織として機能することを大切にしたい。そして、地域・保護者との連携を密にしながら、子どもに内在する力を信じ、その子のよさや可能性を引き出し、自ら考え判断し、一人一人が輝く学校づくりに努めていきたい。



## 笑顔いっぱい やる気いっぱい 一人一人が輝く学校を目指して

田之浦小(隅) 長野 則子

### 一 はじめに

本校は、志布志市の北東部に位置し、田之浦校区のほぼ中央を安楽川(田浦川)が流れ、近くには御在所岳がそびえ立つ豊かな自然に囲まれている。また、神楽やだご祭りなど、昔から受け継がれている伝統文化があり、地域をあげて守り育てている。

平成二十四年度から特認校制度を導入し、令和四年度は、複式二年级と単式二年级、特別支援学級一学級の計五学級に三十二人の児童が在籍している。

### 二 学校経営の方針

「心豊かでたくましい体をもち、自ら学ぶ田之浦の子を育成する」を学校目標に掲げ、創立百四十七年の歴史や伝統、教育的風土を生かし、「やさしく、かしこく、たくましく」の校訓を指標として、一人一人の可能性を最大限に発揮し、「知」「徳」「体」のバランスのとれた児童の育成に努めている。

### 三 取組の実際

(一) 基礎学力の定着・向上のための実践  
「生きる力」の土台としての基礎学力の定着・向上を目指し、授業における学習の

しつけ、振り返りと見届けの徹底、体験的活動やICTを活用した「学ぶ楽しさ」と分かる授業」に取り組んでいる。

令和三年度から二年間の地区指定を受け、指導法改善(ICT・複式)の研究に取り組み、学習の見通しをもたせるための工夫や振り返りカードの活用、三角ロジックを意識した発問の精選、他校との遠隔合同授業による単式指導の実践を行い、児童全員が「できた!」と感じる授業づくりを行っている。

### (二) 心の教育の推進

そろえる(あいさつ・はきもの)を実践事項とし、あいさつでは、「立ち止まって、相手の目を見て自分から」を合言葉に教児一体となつて取り組んでいる。登校指導で校門の前に立っていると、校庭から職員と児童のあいさつの声、子供同士のあいさつの声が聞こえてくる。気持ちのよい一日のスタートである。また、はきもの(靴・トイレのスリッパ)をそろえることで、後から来る人のことを考えることができる、他者を思いやる心の育成に努めている。

特色ある活動としてのパッションフルーツ収穫体験、ピーマンの苗植え、梅ちぎり、しいたけ駒打ち体験、神楽、だご祭りのだご作りなど、様々な体験活動を全学年一緒に行っている。これまで経験している上学年児童が下学年児童に教える姿、下学年児童が上学年児童のように上手になりたいと思うなど、全学年が一緒に活動することで思いやりや尊敬、地域への感謝の気持ちが生まれている。

### (三) 体力向上と健康教育の取組

児童は登校すると体育服に着替え体力づくり「田之浦十のチャレンジ」に取り組んでいる。ボール投げ、フラフープ、縄跳び、鉄棒など、全部で十種目の内容に各学年の目標があり、全種目の目標達成を目指す。児童は学年に教えてもらったり、数を数えてもらったりしながら練習している。また、健康委員会が毎月行う「健康タイム」では、パワーポイントを使い、児童が健康についての呼びかけを行い、児童の健康に対する意識の向上につながっている。

### 四 おわりに

保護者や地域の方々の協力で、様々な体験活動が行えることは、児童にとってとても貴重な体験であり、よい思い出となっている。今後も学校教育の充実のため、学校と保護者、そして地域としっかり連携を図り、児童一人一人が輝く学校を目指して取り組んでいきたい。



## 夢に向かってたくましく生きる桜丘西っ子

桜丘西小(市) 松 元 浩 幸

### 一 はじめに

本校は、昭和五十三年四月に開校し、今年で四十五年目を迎える。地域は、道路、公園、公民館等も整備され、住みよい住宅地として評価が高まっている。

本年度の学校教育目標には「夢」の一字を入れ、「心豊かで自主性・創造性に富み、夢に向かってたくましく生きる力を身に付けた子どもの育成」とした。自らの将来に大きな夢を持ち、自己実現のために歩を進めてほしいという願いである。

本編では、夢に向かってたくましく生きるための知・体・徳の領域における児童や教師の取組について紹介したい。

### 二 取組の概要

#### (一) 学力向上に向けた取組

「公言葉は、『目指せ無答率0%』」

全国学力・学習状況調査や鹿児島学習定着度調査において、無答率が高いことが赴任当初から気になっていた。そこで、「無答を0にしよう。」と職員に呼びかけ、そのための授業の在り方等について、職員研

修や面談等で語った。高学年の各種調査だけではなく、全学年の単元テスト等においても、最後まで粘り強く考え抜く力を育ててきた。

その結果、各種調査における無答率は1%未満にまで下がるとともに、平均通過率も上昇傾向にある。

#### (二) 一校一運動

本年度から一校一運動として、「ラジオ体操」に取り組むことにした。理由は次の三点である。

ア 運動の得手不得手に関わらず、全員で取り組むことができる。

イ コロナ禍により夏季休業中の朝のラジオ体操が中止となる中で、運動の日常化を図る一助となる。

ウ 運動会前のラジオ体操の集中練習をする必要がなくなり、他の練習に時間をとることができる。

一学期はじめに全学級へラジオ体操のCDを配布し、教科体育の準備運動等で実施するようにした。その結果、本年度の運動

会開閉会式の準備(整理)運動では、全児童が見事な演技(ラジオ体操)を披露することができた。

#### (三) 朝のボランティア活動

六年生は、始業前の十分間、自主的に校内清掃を行っている。ここでいう「自主的に」とは、清掃場所も自分で見つけて活動を行う自主性のことである。いつもの清掃場所が終わると他の場所を手伝ったり、やることはないかと聞きにきたり、雨の日は傘だなの整理をしたりする。さらに、二期半ばからは、掃除をしながら「おはようございます。」と、登校してくる下級生に挨拶をしてくる六年生が増えた。

本校の体育館には、「礼を正し 場を清め 時を守る」の書が掲げられている。子どもたち自らがこれらの活動を主体的に進めていることは、頼もしいかぎりである。

### 三 おわりに

本校に赴任して二年目。全国どの学校も同じであろうが、コロナ禍でいかに教育課程を実施していくかが課題であった。大きな声で歌うこともできず、給食も全員前を向いて黙食するなど、多くの活動が制限される中で、「どうしたらできるか。」を職員と共に考えた。そして今、ようやく、諸活動が少しずつ開かれている。将来の予測が困難な今だからこそ、子どもたちには夢に向かってたくましく生きる力を身に付けてほしいと願う。



## 「前進」伊仙中

伊仙中(大) 高橋 裕 雅

### 一 はじめに

本校は昭和二十三年に開校し、本年度創立七十五周年を迎えた。これまでの卒業生は五千二百七十六名を数える。学校は標高七十メートルに在り、徳之島の南端近く、伊仙町のほぼ中央に位置し、校舎の二階からは南西に東シナ海、遙かに沖永良部島を眺(のぞ)む。現在生徒数九十二名・五学級で、今後増し令和六年には百十名を超える見込みである。校訓は「前進」、何より石碑に刻まれた建学の精神の次の言葉が重い。

「人生の最も苦しい いやな辛い損な場面を、真つ先に微笑みをもって担当せよ」

現在、教育目標に「自ら気付き 考え 行動する 自立できる生徒の育成」を掲げ、日々の教育活動の充実に取り組んでいる。

### 二 取組の実際

#### (一) 生徒会の取組

新しい生徒会がスタートするとまず一年間のスローガンを決めていく。本年度は「フオー ワンズ スマイル」誰かの笑顔のた

めに」。入学式・卒業式・体育大会・文化祭・修学旅行・宿泊学習・あいさつ運動や部活動激励会等全ての学校行事や日常活動の生徒会活動を貫く柱として合い言葉にしている。そして、月一回の生徒朝会では、

本部並びに各専門部が、映像や実演で呼びかけの工夫を図っている。感嘆させられたり笑わせられたり考えさせられたりと実際に楽しく有意義なひとときになっている。本年度はいじめ防止宣言や校則改正のルールづくりが三か月かけ、何度も話し合いを重ねて取り組んだ。生徒自らがよく気付き考えた主体的な活動となっている。

#### (二) いせんクリエイト

昨年度、全国学力・学習状況調査や鹿児島学習定着度調査、校内の生徒自己評価等の分析から、読解力の弱さや書くことへの苦手意識、読書の絶対量の不足等に何らかの対策の必要性を感じ、本年度、月に一回「いせんクリエイト」と称して言語活動の充実を努めている。第一回目はビブリオバ

#### (三) 体験活動に基づいた郷土・環境学習

二〇二一年の世界自然遺産登録を受けて、郷土についても一度基礎から学習しようとする総合的な学習の時間で取り組んでいる。九月には二年生が地域環境ボランティアの支援のもと林道周辺の動植物の観察とゴミ拾いを行った。後日、町の海岸クリーン作戦にも参加し、山と海のゴミの比較分析に今取り組んでいる。ふるさとの島の自然保護のために自分たちはどう行動しなければならぬのかを本気で考える機会となった。

#### 三 おわりに

先日、中体連の地区駅伝大会で上位入賞し、十一月の県駅伝大会に男女とも出場できることとなった。出発前と帰校後に校長室に、総勢十数名があいさつと報告に来てくれた。三年生曰く、「練習はとてもしつかったけれど、一人ではないから、仲間がいたから頑張れた。」みんなが仲良く、そして切磋琢磨し、自らも輝き、周りを笑顔にすることができる生徒の育成に努めたい。



「暗闇でしか見えぬものがある」

竹子小(始伊) 安藤 政 英

「暗闇でしか見えぬものがある。暗闇でしか聴こえぬ歌がある。黍乃丞、見・参！」

これは御存じ昨年から今年春にかけて放送されたNHK朝ドラ「カムカムエヴリバディ」の中で、尾上菊之助演じるモモケンこと桃山剣之介が映画の登場シーンで語る台詞である。この台詞、どうも初めて聞いたときから、私にはすでに知っているような気がしていた。どこで見たか聞いたか？ そうだ！ 鹿児島東郵便局前の交差点で見た。西本願寺の壁に掲示してあった羽生結弦の言葉だ。昨年の初夏あたりだった(関係ないが、「タッチ」の上杉達也の台詞なんてのもあり目が離せない掲示板である)。その時は確か「暗闇だからこそ見える光がある。羽生結弦」と墨書してあったはず。字面は似てるけれど、言葉の印象は似ていない。

調べてみた。羽生結弦の言葉は、二年前の四

月、日本オリンピック委員会の公式ツイッター動画で彼がコロナ禍の世界に向けた一分半ほどのメッセージの締めくくりのようである。「(でも、三・一一のときの夜空のように)、真つ暗だからこそ、見える光があると信じています」とてもポジティブだ。彼にはほかに名言が多い。すごい。

一方のモモケンの台詞はポジ・ネガどちらにも解釈可能である。暗闇でしか見えないものがある、だからどうなんだ。何が言いたいのか、よく分からない。しかし、受け手任せといい、分からなさ加減といい、じつに今の状況に合っている。

コロナ禍・ウクライナでの戦争・エネルギーや原材料食料品価格の高騰・円安、終わりも行き着く先も分からない。子供たちを取り巻く状況も予断を許さない。このような状況になって初めて浮き彫りになる物事の本質というものがある。明確でないながら輪郭がそれと気付かせてくれる。暗闇でしか見えぬものに瞠目・刮目することの多い日々である。

経験が邪魔をする

財部北小(隅) 松崎 真

どのような場面だったか思い出せないが、初任校時代に先輩の先生に教えてもらった言葉が「経験が邪魔をする」という一言である。

その当時、何事もいろいろな経験を積んで、教師として一人前になりたいと思っていたときである。たくさんの経験が教師の力量アップにつながると思っていたので、相反するようなこの言葉は特に印象に残っている。

それから、年数を重ねるごとにこの言葉を実感した。若いころに何か提案をすると、ベテランの先生に「それはやったことがあるが、うまくいかなかった。だからこの案にしよう。」と言われたことがある。もちろんベテランの先生もよかれと思って助言していることである。年数を重ねていくと逆に若手の先生に、「こうするとこんな問題が出てくるよ。こうやった方がいいのではないか？」と無意識にアドバイスしていることもある。

最初に印象に残った数字や出来事がある。その後の判断に影響を及ぼすという認知バイアスの一種らしい。

管理職として、いろいろな場面で何を選択して、どうするのか、という最終的な決定を行う機会が増えた。これまでの成功体験や失敗体験を基に判断することがほとんどである。しかし、自分がうまくいった経験を判断基準として、新しい意見や取組に目が向けられていないのではないかと省みることがある。教育課程の編成や諸行事の計画等を行う際、ときどき「経験が邪魔をしていないか」という視点で見直すこともある。これまでの経験が自分の基本とはなるが、今後あらゆる選択や判断の場面において、無意識のバイアスがかかっていないかを忘れないようにしたい。

「できないと思つたら？」

「やらなければならぬ！」

上市来中(鹿) 川 端 成 實

私の考え方・生き方を大きく変えた「質問」と「答え」。それが、この言葉でした。これは、ちょうど鹿児島市立図書館に勤務し、五〇歳を過ぎた自分を大きく変えたいと思つていた時に参加した心理学系のセミナーで、初めて耳にしたフレーズでした。

その頃、鹿児島市立図書館では、今春オープンした「天文館図書館」を、「本当に天文館に作るのか？」の検討が一年以上続いた時期で、当時の街づくり推進課を中心に、図書館も含め複数課で計画が進んでいました。その間、計画は何度も立ち消えました。しかし、実現を諦めかけるその時に浮かんでくるのがこの言葉でした。そして、関係者一同で励まし合いながら、最後の最後で「実施」の回答をもらったのです。学校でも行政でも、ともすれば「できない探し」が先行して、「現状維持」という名の実質的な後退が見られます。しかし、未来の子供たちを方向付ける私たち教師が、そして大人が「できない探し」に焦点を当て、できない理由を探し続ける。前例踏襲でとどまる「そんな生き方で、良いはずがありません」。

この「できないと思つたら？」「やらなければならぬ！」は、世の中を変えていった成功者の発想です。できないことは、それをできる

ようになったら大きな成長が待つており、たくさんの人々に貢献できるという考え方です。人類の進歩、成長もまた「できない」を乗り越えて今の社会を創り上げてきました。

・ 今できないからこそ、それができるようになる価値がある。

・ 無理だと諦めるのではなく「どうしたらできるようになるか」を考える。

急激な人口減少、失われた三〇年、新型コロナウイルス、ウクライナ侵攻、AIによるシンギュラリティなどなど、時代は学習指導要領にもあるまさに予測困難な時代。だからこそ、この「できないと思つたら？」「やらなければならぬ！」の発想で生きていきたいものです。

## 教育は今日行く

末吉中(隅) 長 船 謙 一郎

「長船さん、教育は今日行く」

生徒指導主任として駆け出しの頃、私が勤めていた学校では毎日のように生徒指導上の問題が発生していた。あまりの多さに指導が後手にまわり、対処療法的生徒指導に明け暮れていた。指導の手順としては、事実確認・指導、保護者の来校による事実の伝達、謝罪を含む事後指導がマニュアルとなっていた。

その日も、生徒への事実確認と指導が終わった

たので担任に保護者への連絡をお願いした。しかし、父親が仕事で来られないとのこと。明日にしようか判断に迷つているときに、あるベテランの先生から冒頭の一言があった。

「そうだ、来られないのであれば、こちらから行くこう。」

父親の退勤時間を待つて担任と共に自宅に向かった。保護者には事実のみを伝え、後は世間話に終始した。その後、その生徒の問題行動は続いたが、保護者とは良好な関係を築くことができた。

当時私は、保護者に事案を説明し家庭での指導をお願いすれば、問題は解決するものと思ひ込んでいた。ところが、実際はあまり効果がなかった。親にしてみれば、一日中働き疲れ切つた状態で学校に呼び出され、我が子のよろしくない情報を聞かされるのである。当然そこには反省や後悔というより、いらだちや反発の心理が大きくなる。

ベテランの先生からの一言をいただいで以来、重要な事案と判断したときには必ず生徒の家庭に向き直接話をするように心掛けた。おかげで保護者との信頼関係づくりという点で効果的であった。

コロナ禍で、家庭訪問をすること自体が難しくなっている。学級連絡網もない時代となった。保護者との信頼関係をどのように築いていくかが大きな課題だと感じる。

先日、若手の先生のクラスで生徒指導上の問題が発生した。私は迷わず声を掛けた。

「〇〇先生、今から行くこうか。」

## ある日の校長講話



### 平和について考える機会に

西始良小(始伊) 二一宮 伊佐武

八月六日(土)から八月二十二日(月)までの日程で始まる夏の風物詩があります。何だと思えますか。高校野球、夏の甲子園大会です。実は、この大会の試合の中で、ある日の一試合だけ試合を途中で中断して、選手はもちろんベンチの中にいる人、審判、そして観客全員が同じことをします。その日はいつでしょう。そして、どんなことをするのでしょう。

それは、八月十五日の正午です。そして、みんな黙祷をします。

八月十五日は「終戦の日」です。今年で七十七回目を迎えます。このことから、毎年、

八月十五日の正午になると、黙祷をして第二次世界大戦で亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに戦争を二度と起こさないと誓うのです。

戦争は、校長先生が生まれる十八年も前に終わりました。だから、校長先生も戦争を体験していません。しかし、校長先生は子供のころ戦争を体験した父や母からよく戦争の話聞きました。お米がなく毎日サツマイモばかり食べていたこと、アメリカの飛行機が飛んできて、必死になって防空壕に逃げたことなどです。

「戦争はいけないことだ。」「平和が大事だ。」と多くの人は言います。しかし、皆さんも知っているとおおり、ロシアとウクライナは今戦っている。終わりは見えていません。ロシアとウクライナ以外にも、今も戦争をしている国や地域が世界にはあるのです。決して、戦争は昔のことではないのです。

日本が戦争をしていたのは、まだ百年にもならない、たった七十七年前のことなのです。戦争が終わったとき、生き延びた多くの人々が思ったのが、空の青さ、そして、生きていることのすばらしさだったと聞いたことがあります。私たちは、このような経験をした人たちのこの思いを受け継いでいく必要があります。私たちは、この国が同じ過ちを繰り返さないために、戦争があったことを忘れてはいけません。

八月の上旬から、戦争を題材としたテレビ番組がたくさん放送されます。皆さんも、家の人といっしょに観て、いっしょに平和について考える機会にしましょう。

### 走ると学力・寿命がのびる

水引中(北) 柏木博之

チーターは何のために走りますか。チーターはダイエツトのために走りません。チーターなどの肉食動物は、エサを確保するために走ります。トムソンガゼルは何のために走りますか。トムソンガゼルもダイエツトのために走ります。肉食動物は肉食動物につかまらないように、命を守るために走ります。動物は生きるためだけに走ります。

陸上百メートル世界記録保持者のウサイン・ボルトは何のために走りますか。サッカー・鹿島ユナイテッドFCの選手は命を守るために走りますか。人間はほかの動物と違い、生きるためだけでなく、体力を高めたり、人生を楽しむために走ります。

走ることによって身体のごが鍛えられるでしょうか。海馬です。海馬は脳の一部で、記憶の司令塔です。ラットを毎日走らせると海馬が大きくなった実験結果があります。人間も同じです。また、理解する力、判断する力などの認知能力が高まります。つまり、学力が伸びるということです。人間は今から一八〇万年前ごろから踵の骨が大きくなり走れるようになりました。それとともに脳も大きくなりました。人間は走れるようになったから進化したといえます。

走ることによって寿命も延びます。みんなの身体の数兆の細胞にはミトコンドリアという小器官があります。ミトコンドリアは酸素を使って身体を動かすエネルギー、病気になるようににはたらく免疫細胞のエネルギーを作っています。走ると新しいミトコンドリアが増えて古いものはなくなりません。だから、寿命が延びます。走るのが苦手な人がいるかもしれませんが。全力で長い時間走る必要はないそうです。ゆっくりと四分以上、できたら朝走ると効果が出ます。人間の先祖は生きるために走っていました。だから、走ることは身体にとってもいいのです。走るかどうかが決めるのはあなた自身です。

(スライドで視覚情報を伝えつつ話をした。)

## 「不満」から「挑戦」へ

### 「サクソフォンの誕生から学ぶ」

川薩清修館高 幸 多 優

私はサクソフォンという楽器を専門に学んできました。この楽器はベルギー出身のアドルフ・サックスという楽器製作者により、一八四六年にパリで特許をとった、発明された楽器です。制作者の名前からサクソフォンという楽器名になりました。一八〇〇年代のフランスの軍楽隊の音は貧弱で評判も悪かったそうです。サックス氏も軍楽隊に対する演奏能力の限界に不満を感じていました。そこで、金管楽器のように遠くまで音が響き木管楽器のように素早く音が変化する楽器があると軍楽隊の欠点を解消できると考えて研究が始まりました。約八年かけて完成した楽器はヨーロッパ各地の軍楽隊で採用されるようになり、世界中に広まってきました。

しかし、この大成功の裏では楽器制作者や他の楽器演奏者からのやつかみ、ひがみが絶えなかったようです。晩年は破産にまで追い込まれ、ヨーロッパからサクソフォンは消えかかってしまいました。そんな状況の中、アメリカで表現

力の高い楽器として人気を博し、ジャズ奏者がパリのモンマルトルのキャバレーで演奏している場面を「黒人が吹く大きなパイプ」という記事でフランス国内に広がり、世界中の音楽家が認めていったのです。しかし、それはサックス氏が亡くなってからのことであり、特許申請から五〇年ほど過ぎてからのことでした。

みなさんは日常生活の中で不満を感じることはありませんか。その不満を解決しようと考えて、努力することがあります。不満は成功へのヒントが隠されています。「不満」を感じ、原因を見つけ、自分で解決する「挑戦」へとチェンジしてみてください。サックス氏は自分の発明した楽器の可能性を信じ、挑戦し続けた人生でした。マザーテレサの言葉に「神様は私たちに、成功してほしいなんて思っていない。ただ、挑戦することを望んでいるだけよ。」とあり、挑戦することの大切さを教えてくれます。みなさんも不満を挑戦に変えたと新しい自分を発見することができると思います。

# 話のひろば



## AIスピーカーと

DX

春山小(市)

北 洋 昭

「今日の天気は？」  
「・・・」朝、着替  
えながらAIスピー  
カーに尋ねて、まだ  
使えないことを思い  
出す。それなのに、

部屋を出る時に無意識に「電気を消して」と言  
いかけて、

「ああ・・・」

異動のため引越したばかりの四月当初はA  
Iスピーカーを設定し直す余裕がなく、使えな  
いまま数日を過ごした。そして、AIスピーカ  
ーがいかに自分の生活に入り込んでいたかを実  
感した。家電のオン／オフをはじめ天気予報や  
最新のニュースの確認、時には事典やタイマー  
や計算機になったり好みのBGMを流してくれ  
たりもする。全てリモコンやスマホでもできる  
ことなのだが、朝、着替えながら天気予報を確

認したり、夕方、「今日の大谷はどうだった？」  
と尋ねたりするだけですぐに詳しい情報を得ら  
れるような生活に慣れてしまうと、それまでの  
生活がひどく不便に感じられてしまう。興味本  
位で使い始めたのだが、いつの間にか必需品に  
なっていた。

そんなAIスピーカーを校長室の廊下に置い  
てみたことがある。子供たちは初めのうちはラ  
イトのオン／オフを試したり、難しい計算をさ  
せて速さや正確さに驚いたり、月までの距離を  
尋ねたりと示されたとおりの使い方をしてい  
た。しかし、しばらくするといろいろ試しなが  
ら、じゃんけんゲームや怪談話、好きな歌手の  
情報入手など、どんどん新しい使い方を発見し  
ていった。そして、ついには次のような使い方  
をして、学習や生活にも役立て始めた。二年生  
がかけ算九九を言わせて一緒に唱える。三年生  
が捕まえた昆虫の食べ物調べる。四年生がク  
イズを出させてお楽しみ会の出し物の参考にす  
る。五年生が午後の体育の時間の天気を確認す  
る、などなど。中には宿題の答えを尋ねる強者  
も現れた。

さて、小・中学校に一人一台の情報端末が整  
備され、効果的な活用のために研究や実践が進  
められている。本校でも試行錯誤している最中  
だが、まずは子供たちに情報端末を使わせる中  
で、「学習や生活に役立つ便利な道具」という

認識をもたせることが肝要かと思う。それがで  
きれば、子供たちは自ら効果的な使い方を見つ  
けていくのではないだろうか。

## 熟練

鹿屋小(隅)

森 田 勝 二

以前、青少年教育  
施設に勤務していた  
ときに、業務に必要  
ということで小型船  
舶操縦免許など、い  
くつかの資格を取らせていただいた。  
クレーン運転資格もその一つで、救命艇を海  
に下ろす際に必要となり、取得した。但し、ク  
レーンを運転するには、加えて「玉掛け」とい  
う工程の技能講習の受講が必要だった。玉掛け  
とは、荷物に巻き付けたワイヤーなどをクレー  
ンのフックに掛けたり外したりする作業のこと  
である。言葉で言えば簡単な作業に思えるが、  
つり下げる際に重心がずれてしまうと、荷崩れ  
の恐れがあるため、玉掛けの多くは複数方向か  
ら荷物の重心を確認しながら行わなければなら  
ない。しかし、大きな岩など自然物に関しては、  
そのものの重心を見極めることがなかなか難し  
いものである。

令和四年九月十八日から十九日にかけて、強烈な台風十四号が薩摩半島に上陸し、各地で様々な被害をもたらした。本校も例外ではなく、校舎自体に損壊等はなかったが、校内の木々が数本倒された。特に、正門横の大きな柳の木の倒木状況については、テレビでも放映された。十九日の午前中、雨風が残る中、造園業者の方が来られ倒木の撤去作業を始められた。リーダーらしき方の指示で、作業は順調に進んでいた。

直径六十センチメートル、長さ三メートル程の太い幹をクレーンでつり下げて、トラックに積み込む作業に入った。玉掛けの後、地切り（つり下げて荷物を地面から離すこと）に入るが、リーダーはとっさに重心のずれを感じ、幹の一部を切り落とすよう指示された。その後、左右のバランスをきれいに保った状態で地切りが行われ、太い幹は無事にトラックに積み込まれていった。その様子と一緒に見ていた教頭と共に、「ホー。」と感嘆の声を漏らしてしまった。これまで数多くの現場でクレーンを操作し、多様な樹木や荷物を運搬されてきたであろう熟練の勘に魅せられたひと時だった。

ここ最近、当時の業務上取得させていただいた免許や資格などではあるが、今後に生かせることはないものかと思案する自分がある。

## 大胆にして

### 細心の心を

平山小(熊)

雨田 まゆみ

学校創立一四八年の平山小学校に着任し、六月が過ぎる。十六人の子供たちに囲まれ、宇宙留学の取組をはじめとする

特色ある教育活動に、日々奮闘する毎日である。

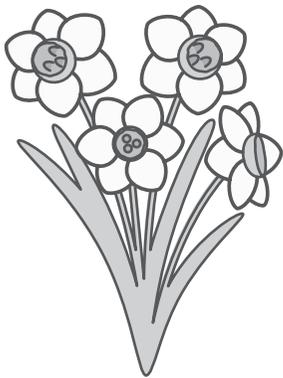
過日、鹿児島の名士稲盛和夫氏が旅立たれた。言わずと知れた名誉県民第一号の称号は、稲盛氏の足跡・苦難の功績を顕したものであり、その功績の支えになった数々の名句名言にも注目が集まっている。それらを集約したものが、「京セラフィロソフィ」という教えである。

学校を管理運営する中で、ややもすると「教育とは……」と近視眼的に教育という領域に特化して子供たちの学びや保護者の動向、教職員・学校本体の管理運営を意識しがちである。稲盛氏は「私はさまざまな困難に遭遇し苦しみながらもこれらを乗り越えてきました。その時々、仕事について、また人生について自問自答する中から生まれてきたのが京セラフィロソフィです」と邂逅され、フィロソフィは、「実践を通して得た人生哲学であり、その基本は『人間としてこういう生きざまが正しいと思う』ということです。」と述べられている（「」は同原文のまま）。

その中の、「正しい判断をする」(大胆にして細心さをあわせもつ)の項が気にかかり拠り所としている。

意のとおり、大胆と細心は両極にあるが、それ故に、そのよさを融合・あわせもつ思考や仕掛けを心がけることを続けることにより、よりよい仕事につながるのとこと。また、決して中庸という概念を目指すのではなく、細心の心がけや周到な準備・評価等を突き詰めつつ、大胆さをもって大鈍を振るうということによって事が成るということになる。

学校の日、一週、一月、一学期、一年の中で、判断を要することが目白押しである。教育という領域的な枠だけではなく、子供たちを育み学びへ導くという業務・生業として、「子供たちの学びになるのか、将来のキャリアアマインドにつながるのか、地域づくりに資するのか、教職員の資質向上は……」を心に置き、大胆にして細心に日々精進したい。



## 読書案内



■サーモン 文／あいきじゅん 絵

### ムルフィール

東城小(大) 永井孝典

「ムルフィール」とは造語で、方言の「ムル(とても)」と英語の「feel(感じる)」をあわせた「とても感じる」という意味です。本書は、鳥唄漫談バンド「サーモン&ガーリック」の、サーモンこと新元一文氏と瀬戸内町のイラストレーターで、風刺漫画なども手がけるあいきじゅん氏が「ムルフィール2021」という曲の歌詞を絵本にしたものです。

鳥も昔と違って、スマホがあれば何でも情報

が入り何でもポチッと注文できます。台風さえ来なければ、指定した日に商品が届く便利な環境になりました。子どもたちは、ユーチューブやオンラインゲームに夢中で、月の満ち欠けや潮の干満、奄美固有の山野草の開花など、当たり前にある自然の変化に目を向ける時間が少なくなりました。

本書は、シマの先人が残した「シマの音楽」をヒントに絵本にしたもので、先人たちが育んできた文化や営み等、現代では失われつつある豊かさに思いをはせることができ、また活字の力とユニークな挿絵に「楽しみ」を見つづけることができます。

本校では、筆者を講師に迎えシマ唄学習も実践しており、地域に残る唄や歴史について学び、ふるさとを愛し、たくましく生きる力を身に付けた子どもの育成に取り組んでいます。

目の前に広がる波静かな「内海」と、希少な動植物の宝庫である「たかばち山」、野生生物ナイトツアーができる「三太郎峠」。

アカショウビンなどの夏鳥やリリカケスなどの留鳥、冬鳥のサシバの鳴き声などを聴くことができる自然に恵まれた環境の中で「感じる力」

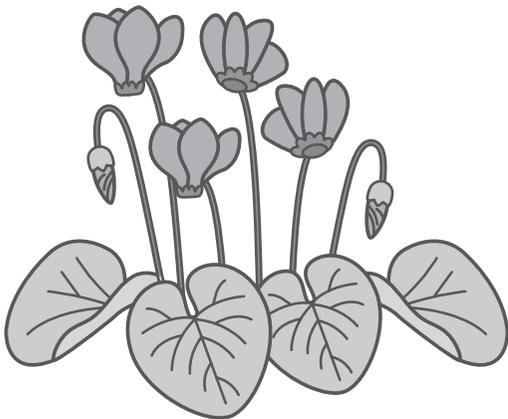
を取り戻しています。

鳥に赴任し、シマ唄学習を通じて出会った筆者とのご縁は、決して切れることのない貴重で大切なご縁になりました。

♪進んで行くこの世の中 無くなったモノも多くて 無くなったモノの中に 大切なコトがあったかも まだ今なら戻れるはず 考えるな感じる 感じる力を取り戻そう♪

※「ムルフィール2021」の動画は、ユーチューブでも配信されています。

一般社団法人巡めぐる恵めぐる 七七〇円



■ 榎野俊明 著

## 心配事の9割は起こらない

東谷山中(市)市 園 誠

校長という職に就いてから、というわけではなく、私自身の性格からくることだと認識しているのだが、私は先々のことを考え過ぎて、不安になったり、余計な心配をしたりすることがよくある。当然、考えることは、仕事のことほとんどではあるが……。私ほどではないにしても、同じような思いをされている先生方は少なからずおられるのではと思う。

今回、紹介する本は、曹洞宗徳雄山建功寺住職であり、庭園デザイナーの榎野俊明さんの著書「心配事の9割は起こらない」である。先に書いたが、私の悪い癖で先々のことを考え過ぎて、不安や心配が大きく膨らみ、負のスパイラルに迷い込むこともあり、このような考え方を何とか変えたいと常々思っているのだが、そう簡単ではないようだ。そのようなとき、書店でこのタイトルが目に入り、本書を手にとって

みた。冒頭の書き出しに、「余計な不安や悩みを抱えないように、他人の価値観に振り回されないように、無駄なものをそぎ落として、限りなくシンプルに生きる。」また、「物事を客観的にみれば『何でもないこと』に振り回されていくことが多い。」と書かれてあり、心にすんなり入ってきた。確かに、あれこれ心配していた事案も過ぎ去ってから考えると、取り越し苦労であることの方が多いような気がする。著者曰く、ポイントは「減らす」「手放す」「忘れる」だそうだ。

また、著者は「私たちは『いま』をどう生きるかしかない」とも述べている。考えてみると、私たち人間は、今を生きているのにもかかわらず「過去」とか「未来」のことで悩み、考える。終わってしまったことを思い返してみても、まだ来ない未来のことを心配しても仕方ないと思っただけでもない。今の職から離れない限り、仕事面での心配事は尽きることはないのだから、なるべく心配事の先取りはせず、心配事のほとんどは起こらないと信じ、今の時を精一杯努力していこうと思う。

三笠書房 六八〇円

■ 宮口幸治 著

## ケーキの切れない非行少年たち

野神小(隅)田 畑 悦 郎

筆者は精神科医で、精神科病院での勤務の中で、問題行動や犯罪を繰り返してしまう子どもたちの多くは、認知機能の問題、つまり発達障害や知的障害があることに気付く。しかし病院でできることは、結局は投薬治療といった対症療法しかなく、根本的な課題解決にはならないことを痛感する。

さらに筆者は、課題解決のヒントを得るべく、病院を辞め、障害があり犯罪を繰り返してしまった子どもたちが集められる医療少年院に赴任する。そこで目の当たりにしたのは、入所している子どもたちは、それまで問題があっても病院に連れてこられず、障害に気付かれず、いじめられたり非行に走ったりした結果、警察に逮捕され少年鑑別所に送致され、そこで初めて「障害があった」と気付かれる現状であった。

本書では、そうした筆者がこれまでの勤務経験をもとに、問題の根深さは多くの学校でも同

じであることへの警鐘を鳴らすとともに、問題行動や犯罪を繰り返してしまう子どもたちの特徴や、矯正・更生に向けた手立て等について、事例を交えながら分かりやすく提案している。

また、筆者は、本書において対人スキル・感情コントロール等の支援や、全ての学習の基礎となる認知機能への支援を系統立てて行うことの重要性を述べた上で、学校でも一日五分あればできる認知機能強化トレーニングの方法や、ほぼゼロ予算でできるトレーニング教材の製作方法を紹介している。トレーニングは楽しみながら取り組めるパズルやゲームのような課題である。

自校を含め、どの学校にも、認知機能に問題を抱える子どもがいるのではないだろうか。その子にとって毎日の授業は、教師の言葉や教科書の文字の意味が全く分からず、苦痛でしかないはずである。そんな子どもたちに、系統立てた支援が真に必要ではないか。そのようなことを考えさせられた一冊である。

株式会社 新潮社（新潮新書）

七二〇円（税込） 七九二円

## ■大村はま

### 灯し続けることば

南薩養護 谷村 真由美

大学時代に大村はま先生を知り、数々の著書に触れる度に、このような教師になりたいと胸ときめかせていた。教職に就き、著書を読み返す度に、先生の教えを実践するのは容易なことではないことを痛感し、背筋を伸ばす日々が続いている。その著書の一冊として紹介したい。

大村はま先生は、一九八〇年まで五十二年間の国語教師の後、九十八歳まで講演や執筆活動に尽力された。この著書には、生涯の教えの中から、五十二の珠玉のことばとその説明が掲載され、奇しくも生涯を閉じる前年に発行された。その機に手にしてから、今も傍らに置いている。掲載されていることばの一つ一つは、大村先生の人柄からあふれる温かさや親近感をもって胸に広がり、同時に、教職にある者としてのありようが容赦なく問われる厳しさもある。例えば、研究授業に関わることばの章の、「研究する態度を失った教師はどんなに優しい声や手練

手管を使ってみても子どもの気持ちをつかめません。」ということば。教育技術が多様化しても、それを用いる教師自身が成長し続けることの大切さ。毎月一回の研究授業を行っていた先生であればこそその説得力をもって胸に響く。

また、「ほめる種をまく」、「子どものコップは小さい」、「わかっていると言えないこともあります。」など特別支援教育の視点にも通じる内容も多い。子ども一人一人の違いや学びの様相をとらえて、独自の表現で子供から学ぶことの大切さが示されている。学習評価の在り方等、時代が変わっても、時を超えて通じるプロの哲学として、また、こうしなさいでなくこうしたらよいですよと具体的に、また、前向きに導く指導者の姿勢として、今後も学び続けたい。

前任校から学校経営方針のめざす教師像の一つに「子供の姿から学ぶことのできる教師」を位置付けている。教師一人一人の心に灯り続けめざす姿が実現に至るよう、今後も厳しく背中を押してほしいと思う一冊である。

小学館 九五二円

「やめられない」とまらない」は某お菓子CMの有名な言葉だ。胸を張れるような高尚な趣味などない私には「趣味・文芸」の執筆は少々荷が重い。ただ、少年時代に始まり、今もなお「やめられない」とまらない」ものが二つあることに気が付いた。その二つを紹介して拙文としたい。

一つめは「星」。夜空に輝く星、天体のことである。肉眼で見えるのはもちろん、望遠鏡を覗く瞬間は今でも心躍る。星の写真を撮るのも楽しい。この星、天体との出会いは小学五年生に遡る。口径6cmの小さな望遠鏡であったが、初めて見る土星の姿に鳥肌が立ったのを今でも忘れない。口径6cm、しかも星の動きを追尾しやすい赤道儀の架台ではなく経緯台であったので、ほんの数秒見ているとすぐに望遠鏡の視野から土星は消えていく……。そんな観察であったが、深い漆黒の宇宙空間にぽっかりと浮かんでいるリングをもつ土星の不思議な姿に心から感動した。

### 趣味・文芸

## 「やめられない」とまらない」？

緑が丘小(大) 中村俊一

ラをもって出かけることもあった。教員となってからは転勤を繰り返すうち、持っていた望遠鏡もいつしか売り、星空を見上げる機会もずいぶん減ってしまった。ただ、二つの自然の家勤務時代に施設の望遠鏡で子供たちと一緒に天体観察をしたり、星の話をしたりできたのは、とても充実した時間だった。その時は少年時代に描いたプラネタリウム解説員の夢が少しだけ叶ったような気さえした。

今、現在の勤務地、奄美の満天の星空を眺める度、「やっぱり星っていいな……宇宙ってすごいな……」を改めて実感している。まさに「やめられない」とまらない」である。

ことになるのだが、教員になってからもオートバイ熱は冷めなかった。鹿児島県での教員生活スタートもハンドドル、ステップ、マフラーを換えたゼファーと一緒だった。

現在は教習所で大型二輪免許が取得できる時代となっている。法改正の当時、教習所が大型二輪教習できる資格を得るには、その教習所から十人連続で二輪免許の限定解除者を出さないといけなかった。その当時の私は喜んでその候補者に手を挙げた。その教習所で練習させてもらい、教習所のOKが出たら試験場に限定解除の試験を受けに行く。無事合格。その後、現在まではZX10が相棒である。

若い頃のように遠くへツーリングに行くことは長い間できてはいないが、まだ多少の元気があろううちにあの頃のように見知らぬ風景の中を気持ちよく走りた

それからというものの、小学生なので内容もたいてい分らないのに、「天文ガイド」を毎月購入し、天体写真を眺めてはその美しさのために息をつき、親のカメラを借り、小学生でもどうにか撮れる星の写真の固定撮影にも没頭した。行ったこともなかったプラネタリウムにも毎週のように通い、いつしかプラネタリウム解説員が将来の夢にもなった。高校や大学時代には、星がきれいに見える長野の山まで望遠鏡とカメラ

二つめは「オートバイ」これもずいぶんと長い付き合いだ。高校時代のCB50に始まり、中型免許を取得してからは、GSX250E、ノーマルでもいい音だったZ400GP。また、XL250Rで北海道野宿ツーリングにも三回行った。ツーリング先で出会うナナハンライダーたちを見て、限定解除への願望が強くなったのもこの頃だった。

私はもともと埼玉県出身のだが、当時の埼玉県における二輪車限定解除の試験合格率は5%と言われるほど超難関試験。二回チャレンジしたが不合格。その後、教員として働き始める

定年後、モンキー125を相棒に日本一周を計画しているS校長先生がいる。負けじと私も定年退職したら、(私の場合二週間くらいでもいいので……)あの頃のように北海道野宿ツーリングにチャレンジしてみようかと夢見ている。これまた「やめられない」とまらない」である。少年時代から「やめられない」とまらない」「星」と「オートバイ」。でも、もしかするともう三十年以上も続いている、子供たちとの喜怒哀楽の充実した毎日こそ、これまたなかなか「やめられない」とまらない」の一つなのかもしれない。



## 今も昔も変わらぬ風吹く街・

### 祁答院町

大婁小(北) 岡 留 一 正

#### 一 はじめに

祁答院町(けどういんちょう)は、鹿児島県薩摩郡に所属していた町で(現在は薩摩川内市)一九五五年(昭和三十年)に大村、黒木村、蘭牟田村の三村が合併し成立した町である。二〇〇四年(平成十六年)十月十一日、川内市等と合併して薩摩川内市となり、四十九年の町政の歴史に幕を閉じた。

町域は現在の薩摩川内市祁答院町蘭牟田(旧・蘭牟田村)、祁答院町上手、祁答院町下手(旧・大村)、祁答院町黒木(旧・黒木村)にあたる。鹿児島県のほぼ中央部に位置し、北はさつま町、南は始良市に隣接している。四方を山に囲まれ、十分の七が山林で、山の斜面などを利用して、梨・葡萄などを生産している。街は主に瀬早川・久富木川・秋上川沿いの平野部にあり、米作り、煙草、苺、肉牛の生産も盛んである。

蘭牟田池は海拔二九五m、周りが四kmの湖である。春には梅や桜の花が咲き、泥炭(植物が枯れて積り炭のようになったもの)が浮島を作っている。二〇〇五年(平成十七年)十一月八日、蘭牟田池がラムサール条約湿地(水鳥の住む大切な場所として世界に認められた湿地)に登録された。絶滅危惧種であるベッコウトンボが生息している湖でもある。また、温泉が湧き出ており、住民の憩いの場として利用されている。

#### 二 校区の概要

祁答院町には、黒木・上手・蘭牟田・大婁の四つの小学校と、祁答院中学校の一つの中学校、合わせて五校が設置されている。薩摩川内市の施策である小中一貫教育に平成十八年度より取り組んでおり、祁答院中学校区小中一貫教育として本年度は第六ステージの研究を行っている。小中一貫教育を進めるにあたり創設された「ふるさとコミュニケーション科」の取組では「ふるさとを知り、ふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思い、ふるさとに尽くそうとする心を育てる」と「異年齢集団での学びや地域の人々との交流を通して、豊かな表現力やコミュニケーション力を高める」ことを目標に、各学校の教育課程に年間計画として設定し、児童と生徒が交流を深める行事や、地域の産業について調べたり、地域の方を講師に招き学習したりする時間などがある。本年度より薩摩川内市が取り組む「魅

力ある学校づくり」を推進し、「魅力ある学校」「魅力ある授業」「魅力ある人」「魅力ある地域」の四つの柱をもとに、「児童生徒・保護者・地域・教職員の声」を身近な意見として聞いて、教育活動に生かした取組にしている。これらをもとに不登校対策の取組を行い、特に未然防止の取組に特化し、全ての児童生徒にとって「心の居場所」「絆づくりの場」となる学校づくりを進めている。

#### 三 地域の力

本地域には古くから伝わる伝統芸能が数多く存在し、継承されている。しかし少子化の影響から、どの学校区も児童・生徒数が減少しており、伝統芸能の存続が懸念されている。上手地区の太鼓踊り、俵踊り、黒木地区の黒木鷹踊り、蘭牟田地区の棒踊り、金山踊り、下手地区の南方神社・川東バラ踊り、轟・種子島踊りなど、それぞれの地域にある文化を子どもたちに伝え教える取組が続いている。これは学校教育への大きな支援にも通じており、地域の人々総出で子どもたちを見守り、伝統芸能継承と同時に地域の力として次世代の人材育成にもつながっている。

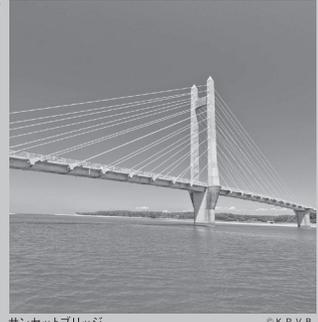
#### 四 おわりに

地域と共にある学校。そこに生活する子どもたちを、保護者・地域の人々・学校職員が一体となって支え合う街、祁答院町。今も昔も変わらぬ風が吹いている。

# 心が変われば行動が変わり 習慣が変わる。

(ウィリアム・ジェームズ 1842~1910)

習慣が変われば人格が変わり、  
人格が変われば運命が変わる。  
よい習慣を作りたい。

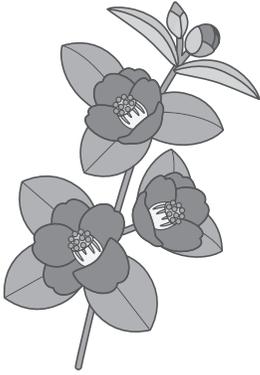


サンセットブリッジ

© K.P.V.B

提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



## 一般財団法人校長会館だより

校長会館主催の教育講演会につきまして、十二月十一日(日)に無事終了いたしました。開催にあたって多くの方々にご協力いただきました。感謝申し上げます。次年度も宜しくお願いたします。

### 教育長異動

○新任 令和四年十二月十二日付

伊佐市 春田 浩志 氏

(元伊敷台小学校長)

### 季節の言葉 「師走」

しわす

祿寝よし 宿は師走の 夕月夜

松尾芭蕉

師走(しわす)

は十二月を意味する言葉で、師(僧侶)も走るほど忙しいという意味だと言われています。



## 編集

### 後記



本校の大きな行事といえば、運動会と学習発表会。全児童生徒七人のうち六人が隣接する医療機関に入所しているため、普段は親子の面会もままならない状況が続いています。そのため、このような学校行事は、お子さんに会える貴重な機会であり、保護者の方々には楽しみにしていただいています。しかし、感染症対策に万全を期さなければならぬため、昨年の運動会では、保護者には体育館で競技する我が子の姿をオンライン中継された別室で見ただくという形での実施でした。今年は、安心・安全を担保しながらも、少しでも近くでお子さんを御覧いただきたいという思いから、運動会は体育館の舞台上から透明の衝立越しに、学習発表会は体育館の後方の席から、という形でしたが、同じ空間で見ていただくことができました。行事などの計画を検討するとき、数か月先の感染状況、社会状況を見通せる力があれば、とコロナ禍になってから何度思ったことかしれません。「赤毛のアン」の中でアンが「曲がり角の先に何があるか分からないけど、きつと素晴らしい世界があるって信じている。」と言うセリフがあります。先が見通せない現在、まさに時代の曲がり角なのかもしれません。「先が見通せない」という言葉が浮かぶたびに、このアンのセリフを思い出して、「きつと素晴らしい世界が待っているよ。」と子どもたちに伝えなければと思う日々です。二期の行事等で御多用な折、玉稿をお寄せいただいた執筆者の皆様にご感謝申し上げます。皆様の玉稿が読者にとって曲がり角の先の素晴らしい世界への一筋の光となることを信じています。

皆与志養護学校 井上隆司